

# 常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年7月20日(火)

## ◇ とある「随筆 (エッセイ)」に 学ぶ

とある「エッセイ」からの抜粋。

<前略>

筆記具を強く握りしめて書くために、右手中指の第一関節左部分の皮膚が隆起し、硬くなる。これを「ペんだこ」と言う。

「書け。書け。とにかく書け」と中学校時代の恩師は繰り返し説いた。書くのはめんどくさい。いやだなあと思いつつも、私は書いた。力一杯書いたから、「ペんだこ」は大きくはれあがった。鉛筆を握り締めて懸命に勉強した日は、ペんだこはひりひりするほど痛かった。その逆に、あまり充実していなかった日は、ペんだこは鳴りを潜めた。

いつしか、ペんだこは、私の勲章となった……。頑張った日は、いつもペんだこが褒めてくれた。

<後略> 出典先:北野小学校 HP【校長だより6月号(丹羽郁人校長 執筆)】

エッセイを読み、自分の「右手中指の第一関節左部分」を確認する。

少しがっかりした。

こんもりと盛り上がり、見て分かるほど存在感を主張していた自分の「ペんだこ」は、触った左手の指を左右に動かさなければ存在が確かめられぬほど小さくなっていた。

勉強や事務仕事で鉛筆やペンをしっかりと支えていた自分の中指の役割が、キーボードやマウスの操作を中心とした事務仕事に変わり退化したためだろう。ペんだこが小さくなった自分の中指。きれいだが、何だか頼りない。

生前は職人だった自分の父親。元々大柄で手も大きかったが、長年、工具を扱い続けたことで、職人独特のごつごつ感のある手が今も記憶に残る。力持ちで、手先が器用で、何でも作り、修理までしてしまう父親の武骨なその手に憧れた。

そして、父親の武骨な手と唯一似た部分が中指のペんだこで、口には出さないが小さな自慢であったことを思い出す。エッセイ中の「勲章」に通ずる。

時代は移れど、小学生の子供たちはこれからも筆記用具を持ち続ける日が続く。只管書いて、書いて、書きまくる努力。地味な努力が人生に粘りを生む。頑張れ。

さて、担任時代に「ペンだこ」で学級通信を書いた。発行の翌日に提出された「生活記録（日記）」に綴られた生徒の返信がなかなか粋。ほろりとくる。



金・土・日の3日間。 勤・努・陽の3日間。 **勝負の3日間** です。

6年前…学級通信を通して、生徒に伝えたこと。

宮崎駿のアニメ「風の谷のナウシカ」で、  
老人が【見てくれの悪い 無骨な手】を見ながら言うセリフがある。  
『 わしらの姫様はこの手を、【働き者のよい手だ】と言ってくれますわい…。 』

自分の手を見てみなさい。

鉛筆やシャープペンシルを持つ「きき手」。  
中指の第一関節の少し上のところ。  
人差し指の方が少しへこんで、その横が硬くなっている。

これが【ペンだこ】。

いつも同じところで鉛筆やシャープを支えているから、  
体がそれに負けないように【たこ】をつくって強くしてくれている。

【見てくれ】は悪い。 でも、この【ペンだこ】こそが、あなたの日々の【<sup>あかし</sup>努力の証】。

翌日の生活ノート(本校の新香山ノート)で、次のような返事が返ってきた。

ペンだこ。 指に出てきて分かる証。

ちらっと見た時、 母にもあるのが分かった。 でも、 私とはちがう場所だった。

母に、仕事のことを少しだけ聞いてみた。

母の【努力の証】を知った。

母は親指で押す作業を何度もするから、親指の先がすごくかたくなる。

親指の感覚がなくなるそうだ。

そこまで…そこのまでに努力している母をはじめて知った。

母の【努力の証】を見て、

1日中はたらいっている母を、はじめte知った気がした。

支えてくれる母のためにも、

毎日をしっかり過ごして、【力の限り】努力して生活しようと思った。

(現在、社会人として仕事をしている)

テスト勉強で苦しくなったら、自分以外の誰かのために頑張ってみなさい。…【底力】がわいてくる。

母の手を「ちらっと見る」。その後「少しだけ聞いてみる」。「ずしり」と母親の努力を知る。これで終わらない。彼女は自分への励みとした。健気さに、ほろりと涙。